

体育理論の授業における障害の教材化

－肢体不自由障害者が直面する課題をふまえて－

駒木彩実 (宮城教育大学)

1. 目的

本研究の目的は、肢体不自由障害のある教師が体育理論の授業において、自身の障害を教材化する方法について明らかにすることである。

2. 研究方法

- 1) 対象者：中学2年生と大学2年生
- 2) 調査方法：体育理論の学習内容である「文化としてのスポーツ」の授業を行い、その際に授業者の障害の情報を組み込んだ資料を活用し、学習の理解を深めることをめざした。
- 3) 分析方法：3件法と自由記述によって、授業評価アンケートの回答を求め、それらを質と量の両面から分析した。

3. 結果と考察

- 1) 両実践とも、9割以上の受講者が「授業に興味を持てた」と回答しており、「教員になった際にもぜひやってみたいと思えるようなものだった」という授業内容に対して肯定的な記述が見られた。
- 2) 両実践とも、9割以上の受講者が「スポーツの歴史について理解できた」と回答し、「バレーボールになぜルールがあるのか、その意味を歴史的な背景と関連させて学ぶことができ、深い学びにつながったと思う」という記述がみられ、バレーボールのルール変遷の理解も含め、様々な人々に広がってきたスポーツ文化についての理解を深めることができていた。
- 3) 両実践とも、9割以上の受講者が「みんなでスポーツを楽しむためには、スポーツのルールを変えることが必要であることが理解できた」と回答した。その一方で、数名が「どちらともいえない」と回答し、自由記述においては「“みんなが楽しめる”に偏りすぎて、“やむを得ないときは”や“その人の優しさ

に任せる”など、スポーツとしての明確なルールが薄れているような感じがした」という記述がみられ、合意形成が十分でなかったことが課題として残った。

- 4) 両実践とも、9割以上の受講者が「スポーツのルールをつくり変える重要性について理解できた」と回答した。また、これに関する自由記述が最も多かった。障害のない生徒や学生にとって、現在あるスポーツを「つくり変える」ということの意味や大切さは、なかなか捉えにくいものであるが、障害のある筆者の経験を教材化したことで、問題を「身近」に感じ、問題意識を持って授業に取り組めた生徒が多かったことが考えられる。
- 5) 大学生を対象にした実践では、ルールを考えていく過程で、スポーツが苦手な人が意見する場面が生まれ、より“みんな”が楽しめるスポーツのルールの議論が実現した。また、議論の際は、立場の異なる者同士がお互いの妥協点を見つける重要性の理解まで得られていた。

4. 結論

本研究では、授業者の障害は「困難」ではなく、課題を身近に捉えるための「教材」として、さらには、スポーツにおいて弱い立場に置かれている人たちが意見する「きっかけ」として生かすことが可能になった。「スポーツの歴史」と「授業者の障害」を教材化したことで、受講者が課題を身近に捉え、スポーツをつくり変える「意味」や「大切さ」を感じながら、課題に取り組めたといえる。

5. 主な参考文献

西村愛志・高橋眞琴・津田英二, 障害のある教員の勤務の状況と課題 :海外での研究動向を手がかりに, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 9(2) : pp.115-123, 2016.